

# 清代八股文における入題について

The “Entering the Topic” Section in the Qing Dynasty Eight-legged Essay.

滝 野 邦 雄  
Takino, Kunio

## ABSTRACT

Continuing on from my previous studies on the “breaking open the topic,” the “receiving the topic”, and the “beginning discussion” sections of the eight-legged essay, this essay seeks to explain the “entering the topic” section. The “entering the topic” section directly preceded the main part of the essay: the “eight bones” of the eight-legged essay. It serves as the guiding point of entry into the essay proper. In the main, it summarized the section in a passage constituting the topic (or question) that was left out. For example, if the phrase “is it surely not a pleasure?” from the “Xue er” chapter of the Analects was the topic, then the preceding passage “To learn something and practice it often” would be the segment that was left out. It was this segment that would be summarized. With the topic serving as the central focus of the “eight legs” that began directly after the “entering the topic” section, the purpose of the summary was to enable the argument to unfold. However, in cases of topics where there was no preceding part of a passage to omit, the topic itself would be summarized as a guiding point of entry to the following “eight legs” of the main essay. Moreover, in those cases where it was the second half of the passage only that was omitted, generally that part would not be summarized. Only the topic would be summarized as a guiding point of entry to that which followed.

## はじめに

入題とは、八股で表現される八股文の本論の部分の直前に置かれ、その導入部となる箇所である。主として、問題文である題目の截去された上文を要約する。これは、入題の直後から始まる八股の部分が題目を中心として議論を展開するためである。ただし、截去された上文がない題目の場合は、題目そのものを要約して次の八股の本論への導入部とする。また、下文だけが截去されている題目の場合は、ふつうその部分の要約は行なわず、題目のみを要約して後への導入部とする。

拙稿では、

破題・承題・起講・入題・提股・出題・中股・後股・收股（乾隆丙戌〔一七六六年〕刊『文家規範』による<sup>(1)</sup>）

のように分類される、清代の八股文のうち、入題を（1）形式・（2）入題の解法・（3）具体例・（4）入題を用いない形式、という四つの観点から検討を行いたい。なお「題目」・「破題」・「承題」・「起講」については、「清代八股文の題目について」（『經濟理論』第310号）・「清代八股文における破題・承題について」（『經濟理論』第312号）・「清代八股文における起講について」（『經濟理論』第313号）において不十分ながら考察を試みた。

## （1）形式

商衍鑒（一八七三年～？）は、入題について次のように述べる。

（1）ここでは、乾隆三十一年刊『文家規範』によったが、八股文の形式についてはいろいろな言い方や分類がなされている。たとえば、盧前は、

破題・承題・起講（小講）・領題（入題）・題比（提股）・出題・中比（中股）・後比（後股）・束比（多くは束比を用いず）・落下（收股）（『八股文小史』九葉～十葉・商務印書館・民國二十六年刊）。

というように分類する。また、王凱符（一九三四年～）は、

破題・承題・起講・入題・起二股・出題・中二股・過接・後二股・束二股・收結（『八股文概説』十七頁・中華書局・二〇〇二年刊）

としたりする。

起講の後、三・四句を用いるを、或いは領上と曰う、或いは領題と曰う、或いは入題と曰う、或いは落題と曰く、亦た之を稱して提筆と爲す者有り。

[題目に] 上文有る者は上を領して以て入題とす。[題目に] 上文無き者は只だ題[目]を領する・題[目]を叫ぶ<sup>よ</sup>を以て入題と爲す。[題目に] 上文無くして下文有る者は、則ち題[目]を領するの後に仍お下文の地歩(余地)を留(用意する)するを要す。上文有り兼ねて下文有る者は、則ち上を領して入題とし本題の界限<sup>(2)</sup>(題界)を點清(はっきりさせる)にす。意は仍お下文を留照(あらかじめ用意して考慮しておく)す。若し全章或いは連章の題[目]の上下の文無き者なれば、則ち渾括(総括・概括)領起を用いて以て入題とす。此れ皆な八股を布置する以前の格式なり(『清代科舉考試述録』第七章 八股文、試帖試概紀及舉例釋義 第二節 八股文之文體・二三三頁：生活・讀書・新知三聯書店・一九八三年第二次印刷)。

起講の後の三・四句の部分を入題と言う。また、領上・領題・落題・提筆など

(2) 題界について、苕上の汪鯉翔は、次のように説明する。

宋儒の書 専ら主として理を説く。其の時、帖括(八股文)もて取用を爲さず。故に毎に後の意を以て明講するは前に在ること、「舉直錯枉」(『論語』顔淵)二句の註の「仁」字①・「養吾浩然之氣」(『孟子』公孫丑上)句の註の「配道義」字・「生亦吾所欲」(『孟子』告子上)三節の註の「良心」字等の類の如く〔註の中で、後の本文の字句を先に解説したり、本文を飛び越えて説明したり〕す。[しかし]今の作文(八股文)は口氣を以て主と爲せば、則ち上節 斷じて下節を預透する(あらかじめはっきりさせる)を得ず、前問 斷じて後問を即侵(直ちに侵す)するを得ず。界 在るの故なり。故に一題に自ら一題の界有り(乾隆九年『四書題鏡』總論・「清題界」条・一葉～二葉)。

- ①『論語』顔淵「樊遲問仁。子曰、愛人。問知。子曰、知人。樊遲未達。子曰、舉直錯諸枉、能使枉者直。……」の朱註に「枉れる者をして直くすれば、則ち仁なり」とあり、本文で孔子がまだ解説する前に、「仁」を説明していること。
- ②『孟子』公孫丑上「其爲氣也、配義與道、無是、餒也」の朱註に「配とは、合して助有るの意。義とは、人心の裁制。道とは、天理の自然」とあること。
- ③『孟子』告子上「生亦我所欲、所欲有甚於生者、故不爲苟得也。死亦我所惡、所惡有甚於死者、故患有所不辟也……」三節の朱註で「秉彝義理之良心」・「秉彝之良心」としているところ。

このように題界に神経質になってきたのは、八股文で口氣を重視するようになってきたからである。八股文は、聖賢に成り代わって題目を解釈するものであるが、題目の截去された下文は、まだ聖賢が述べていないことであるとされ、それを踏まえて発言することは、聖賢に成り代わったという分を超えて自分が聖賢になってしまうと意識されたためである。

ともいう。領上というのは、題目の截去された上の部分を踏まえて（領して）文を作るからである。もしも、上の部分が截去されていない題目の場合は、題目を踏まえたり、題目の文字を呼び起こし（導き出す）たりして入題を作る。下文がある場合は、題目を踏まえて入題を作成して、下文の余地を残しておく。上下ともに截去されている題目の場合は、截去された上文を踏まえて、題目をうけ、そして題目と下文との境界をはっきりさせ、下文も考慮する。全章題もしくは連章題のような時は、渾括領起（上文を概括して領する）を用いる。

盧前は入題の形式について同じように述べている。

或いは一二句、或いは四五句。上文より領し本題（題目）に到る。如し上文無ければ、則ち虚虚（わずか）に本題（題目）を叫起（言及する）するも亦た可なり。如し題目 繁重にして、仍お下文有る者なれば、應に上文より串ねて本題（題目）の末句に到る、或いは〔題目の〕末句の字を明點す、或いは末句の義を虚籠（少し取り込む）し、以て題界を清（はっきりさせる）にすべし。仍お宜しく題前を落到（落ちつかせる）すべし（『八股文小史』第二章 八股文章之結構・九頁・一九三七年商務印書館刊）。

やはり、截去された題目の上文を領して入題を作るという。そうした上文がない場合、題目そのものを呼び出して入題を作る。また、題目が複雑な場合、截去された上文を領して題目の終わりのところまでで入題を完成させ、題目の截去された下文との境界をはっきりさせる。

王凱符（一九三四年～ ）は、次のように述べる。

……以上の三つの部分（破題・承題・起講）ができたならば、〔八股文の〕形式の要求にしたがって、一二句あるいは三四句の過度的な言葉が必要な場合、文章を「正題（八股の部分）」に入れる。この、一二句あるいは三四句の過度的な言葉は「入題」と呼ばれる。入題は「入手」・「領題」・「落題」・「領上」とも呼ばれる。入題の作法は、一般的に題目に上文があるもの（もしも「不亦説乎」を題目とすれば、上に「學而時習之」がある①）は、上文を領して正題（八股の部分）に入らなければならない。題目に下文がある

ものであれば、下文を呼応（考慮）しなければならない。上文があつて下文を兼ねているもの（たとえば『論語』の中の「禮之用，和爲貴，先王之道，斯爲美，小大由之」②のようなものでは、もし「先王之道」を題目とすれば、題目に〔截去された〕上文もあり下文もある）は、こうした類の題目の入題は本題（題目）の論じている内容の境界をはっきりさせなければならない（『八股文概説』上編 八股文概説 二、八股文的結構与作法（四）入題・十二頁・中華書局・二〇〇二年刊）。

①『論語』學而：子曰，學而時習之，不亦說乎……。

②『論語』學而：有子曰，禮之用，和爲貴，先王之道斯爲美，小大由之，有所不行，知和而和，不以禮節之，亦不可行也。

また、『論文約旨』では「論入題」条で次のように説明する。

何を以て之を入題と謂う。蓋し起講は只だ是れ箇の大概を説き，此〔の入題〕に至りて乃ち題〔目〕に入るなり。若し起講 先に説き盡せば，則ち久しく已に題〔目〕の内に在り。何ぞ此に至りて方に之を入題と謂わんや。題に上文有る者は，上文を將って起講の末に於いて帶出すれば，最も妙なり。即ち然らざれば須く上は起講に接し，下は起股を引き，一氣 相い貫くべし。〔そして〕硬（むり）に一句を装（入れる）せざるを得ず。〔もし入れれば〕前後 相い照顧せざるなり。若し上文 題〔目〕の來路に非ざる者なれば，便ち須く入るべからず。若し上文無き者なれば，或いは先ず題中の字を提出して引き起こし，「吾爲學者正告之（吾 學ぶ者の爲に正に之を告ぐ）」及び「試思之（試みに之を思う）」等の語を用いるを得ず（『論文約旨』不分卷・「論入題」條・五葉）。

やはり，ここでも題目に截去された上文がある場合は，その上文を領して入題を作ればよいとする。上文と題目とがつながりがなければ，無理に入題を作る必要はない。もしも，截去された上文がない場合は，題目の文字を用いて入題を作成する。そして，「吾爲學者正告之（吾 學ぶ者の爲に正に之を告ぐ）」や「試思之（試みに之を思う）」等の語は用いるべきでないという。

このように、独立して入題を作成する場合は、截去された題目の上文を領する形式のものが多かったようである。しかし、『文家模範』でいうように、入題は前の起講と後の提股とのつなぎの役目をするという性格上、文章の流れから、起講の末句を入題としたり、提股の頭の部分を入題としたりすることもあるという。

〔入題〕乃ち起講の脈に聯絡（つながる）し、提股の勢いを振動（高める）し、鬬筭接縫（ぴったり合わせる）すること、全く此に在り。起講の文の住（とど）める可からずして、即ち勢いに借りて落下し、起講の尾を以て入題と爲す者有り。提股の文の斷つ可からずして、即ち勢いに借りて講入し、提股の頭を以て入題と爲す者有り。入題の特に主意を出だし、或いは一條あり、或いは二三條ありて、一篇の柱を立て、後に此の文の分股と此と應を作す者有り。此れ又た題に随いて布局するの法なり（『文家模範』不分卷・三十葉）。

では、なぜ題目の截去された上の部分を領し、題目の下の部分は領しないのであろうか。このことについて、直接入題においての領上の説明ではないが、唐彪は次のように述べている。

唐彪 曰く、文の〔截去された〕下文を避けるを要する所以の者は、下文の未だ聖賢の説き出だすを経ず、我 若し先に説けば便ち是れ聖賢の口吻を顛倒（逆さまに）するを以てなり……、と（康熙四十七年刊『讀書作文譜』卷之九・「避下文止宜避意不必避字」條・三葉～四葉）。

題目の截去された下文は、まだ聖賢によって言及されていない箇所であり、その箇所を用いて八股文を書くと、聖賢がこれから言おうとすることを先走って述べてしまうことになるからだという。これは、口氣というものを重視していたためである。

また、路徳は、題目の截去された上文を領して入題を作る場合と、截去された上文がなく題目そのものを用いて（叫びだして）入題（この時は、「叫題」という）を作る場合とでは、作成法が異なるという。そして、上文を領しないもの・

題目のすぐ上の上文ではなく離れた上文を領するもの・上文を領した後に余分なことを説明するもの・上文を領した後に更に上文を敷衍するもの・上文を領した後に「夫」字・「今夫」字を用いて別に入題をはじめるものなどが、入題の作法から外れたものであるという。

領上（入題） 總じて手法を須<sup>もち</sup>う。領法・叫法 各各 同じからず。總じて之を言えば曰く、領は簡にして該なるを要し、叫は虚<sup>ゆる</sup>にして醒めるを要す、と。簡・該（概要）・虚（わずか）・醒（ゆるめる）の四字 一を缺くるも不可なり。諸卷の簡なる者は該ならず、該なる者は簡ならず。虚なる者は醒めず。醒める者は虚ならず。甚だしきは上文を領せざる者有り・緊（すぐそばの）なる上文を捨てて遠き上文を領する者有り・領上の後に好く閒話（むだ話）を説く者有り・領上の後に複（かさ）ねて上文を衍（敷衍）する者有り・領上の後随いて上文を將って抛過（投げ捨て）し、「夫」字・「今夫」字を用いて別に起頭（はじめる）する者有るに至る。[これらの]種種 謬（あやまち）を糾（ただ）さんとするも、總じて之を言えば曰く法無きなり、と（道光丁未刊『時藝階』卷一・「未之學也」條・五十一葉～五十二葉）。

そこで、続いて領上の様々な解法を路徳の解説によって検討してみよう。

## （2）入題の解法

入題の

- ①領上②あいまいな領上③遠くの上文を領する場合④上文を領しない場合
- ⑤入題の長さ⑥入題によくある欠点⑦題目に「此」字がある場合⑧領上と叫題

の八点について路徳の説明をもとに考えてみたい。

### ①領上

題目の截去された上文を領する時、どの箇所にするかについて、路徳は次のよ

うに述べる。

問う領上（入題）文の處、近き上文を以て主と爲すか、遠き上文を以て主と爲すか、と。曰く、須く題脉を看るべし。題脉 近き上文に在る者、十に居ること八九。凡そ上文と本題と緊（密接）に相い接連する處、多く題の要處に係る、必ず須く張口領出（入り口をあけて取り出す）すべし。[そうすれば] 題の來脉 始めて眞にして、題の上界 始めて明らかなり。安くんぞ題〔目〕を強〔調〕して〔その〕文に従い、近きを捨てて遠きを領せんや、と（道光乙巳刊『時藝話』卷一・「退」條・二十八葉～二十九葉）。

先ず、題目の題脈を見るべきであるという。ただし、ほとんどの題脈は題目のすぐ上の上文にあるので、先ずは、すぐ上の上文を領すべきだとする。

## ②あいまいな領上

すべてが截去されたすぐ上の上文を領するわけではない。路徳は、『孟子』滕文公上の「他日」題を例として、次のように言う。

題目：他日

『孟子』滕文公上：墨者夷之、因徐辟而求見孟子。孟子曰、吾固願見、今吾尚病、病愈、我且往見、夷子不來。他日又求見孟子。孟子曰……（太字で示したところが題目である）。

入題：將俟孟子之往而往、果何日乎、使願非眞願、則雖有愈之日、終無往之日、又安得有見之日、積日而月、積月而歲、不已虛擲此日也哉  
 （將に孟子の往くを俟ちて往かんとす、果して何れの日なるや、願いをして眞の願いに非ざらしめば、則ち愈えるの日有りと雖も、終に往く日無し、又た安くんぞ見<sup>あ</sup>うの日有ることを得ん、日を積みて月となり、月を積みて歳となるも已まず、此の日を虚擲（虚しく捨て去る）するかな）

問う、「夷子不來」（『孟子』滕文公上）は乃ち此の題の近き上文なり。[なのに] 此の文 何ぞ張口領出（入り口をあけて取り出す）せず、且つ始終



領せざるや……，と。曰く，……此の題の上文の「不來」の二字は，一經（ひとたび）領出（取り出す）すれば便ち下文の「又求見」の三字に觸れ易し。故に領せざるを以て妥〔当である〕と爲す。領せざるに非ざるなり。但だ領するを明らかにせざるのみ。此の文の「將俟」以下云云（將俟孟子之往而往，果何日乎，使願非眞願，則雖有愈之日，終無往之日，又安得有見之日，積日而月，積月而歲不已，虛擲此日也哉）を看るに上の「不來」を分かち明承し但だ用筆（書き方）渾脱として流れて住（とど）まらず。之を閱るに人をして故より下を照らして，下を洩らさざるを覚えざらしむ。文法（文の書き方）原より是れ活的（生きているもの）なれば，能く題を審する者，自ずから能く法を用う。若し鮮通に拘泥すれば，柄鑿（相い矛盾する）せざる者有ること鮮し，と（道光乙巳刊『時藝話』卷一・「退」條・二十九葉）。

「夷子不來」が題目「他日」の截去されたすぐ上の部分であるのに，そこを領しないのは何故かという，「夷子不來」を領すれば，下文の「又求見」に触れてしまうからだという。ただ，下文とかかわってしまう恐れがあるので，すぐ上の上文を領したことをはっきりさせないのだとする。このように，入題においては截去された下文とかかわらないように注意されていたのである。

### ③遠くの上文を領する場合

時には，近くの上文を領せず，遠くの上文を領する時もある。それは，題脈によるのだという。

問う，〔八股〕文に近きの上文を舍却し，専ら遠きの上文を領する者有るは，何ぞや，と。曰く，須く題脈を看るべし。如し「因民之所利而利之」（『論語』堯曰）の二句題①を作るに，只だ宜しく「思<sup>マ</sup>（惠）而不費」を領すべし。若し「威而不猛」を領すれば，則ち謬りなり。「博學之」（『中庸』第二十章第十八節）の四句題②を作るに，只だ宜しく「誠之者擇善」を領すべし。「固執」の二字を領するが若きは，則ち悖れり。嘗て「寬則得衆」（『論語』

堯曰）一節文③を見るに「民食喪祭」を領す。「<sup>ママ</sup>齋（齊）民盛服」（『中庸』第二十章第十三節）の一節文④は、「天下畏之」（『中庸』第二十章第十二節）を領す。此れ皆な憤懣（みだれる）にして知る無き者なり、と（道光乙巳刊『時藝話』卷一・「退」條・二十九葉）。

- ①『論語』堯曰：子張問於孔子曰、何如斯可以從政矣。子曰、尊五美、屏四惡、斯可以從政矣。子張曰、何謂五美。子曰、君子惠而不費、勞而不怨、欲而不貪、泰而不驕、威而不猛。子張曰、何謂惠而不費。子曰、因民之所利而利之、斯不亦惠而不費乎、擇可勞而勞之、又誰怨、欲仁而得仁、又焉貪、君子無衆寡、無敢慢、斯不亦泰而不驕乎、君子正其衣冠、尊其瞻視、儼然人望而畏之、斯不亦威而不猛乎……。
- ②『中庸』第二十章第十八節：博學之、審問之、慎思之、明辨之、篤行之。
- ③『論語』堯曰：……謹權量、審法度、修廢官、四方之政行焉、興滅國、舉逸民、天下之民歸心焉、所重、民食喪祭、寬則得衆、信則民任焉、敏則有功、公則説。
- ④『中庸』第二十章第十三節：齊民盛服、非禮不動、所以修身也、去讒遠色、賤貨而貴德、所以勸賢也、尊其位、重其祿、同其好惡、所以勸親親也、官盛任使、所以勸大臣也、忠信重祿、所以勸士也、時使薄斂、所以勸百姓也、日省月試、既稟稱事、所以勸百工也、送往迎來、嘉善而矜不能、所以勸柔遠人也、繼絕世、舉廢國、治亂持危、朝聘以時、厚往而薄來、所以懷諸侯也。

ここで、取り上げられた例のうち、「博學之、審問之、慎思之、明辨之、篤行之」（『中庸』第二十章第十八節）についてみると、『中庸章句』に、「此れ誠の目なり。學・問・思・辨は、善を擇びて知ると爲す所以なり、學びて知るなり。篤行は、固執して仁を爲す所以、利して行なうなり」となっており、その上文の第十七節は、「誠者、天之道也、誠之者、人之道也、誠者不勉而中、不思而得、從容中道、聖人也、誠之者、擇善而固執之者也」とある。路徳のいう題脈がどのようなものか理解できるであろう。

なお、題脈については『四書題鏡』で次のように解説する。

來龍を溯り、脉理に切なり。此れ堪輿（風水）方術の要訣にして認題も亦た然り。但だ脉に近き有り・遠き有り・急なる有り・緩なる有り。「參」「贊」と「人〔の性〕・物〔の性〕を盡す」（『中庸』）①・「逢原」と「資深」（『孟子』離婁下）②とは近脉と爲し、而して總じて〔『中庸』の〕「盡性」と〔『孟子』離婁下の〕「自得」とは遠脉と爲す等の類の如し。「則可謂云爾」（『論語』述而）句③の上の「誨」と爲すに接して急脉と爲し、「耕也鋤在」（『論語』衛靈公）句④の上の「君子」に接するは緩脉と爲す等の類の如し。近脉は離れる可からず、遠脉は脱する可からず、急脉は當に緩く受くべく、緩脉は當に急ぎ受くべし。〔それらは〕又た「赤也爲之小」（『論語』先進）と「願爲小相」⑤・「豈得暴彼民」（『孟子』萬章上）と「有庫（ママ）之民（ママ）奚罪」⑥・「禹惡旨酒」（『孟子』離婁下）の數章と「君子存」（『孟子』離婁下）⑦等の類の如し。節を隔て章を隔てると雖も、自ずから應に遙かに承くべし。茲の集まる處處に踪を出し來るを清（はつきりさ）し、脈を領し真に逼るを庶う。搭題の口氣無きが若きは、作者の自ら聯絡（つながり）を爲すに係れば、又た危側（かたよる）險斜の脈多し。備載（詳細に記載する）に及ばず（乾隆九年『四書題鏡』總論・認題脉・三葉）。

- ①『中庸』第二十二章：唯天下至誠，爲能盡其性，能盡其性，則能盡人之性，則能盡物之性，能盡物之性，則可以贊天地之化育，可以贊天地之化育，則可以與天地參矣。
- ②『孟子』離婁下：孟子曰，君子深造之以道，欲其自得之也，自得之，則居之安，居之安，則資之深，資之深，則取之左右逢其原，故君子欲其自得之也。
- ③『論語』述而：子曰，若聖與仁，則吾豈敢，抑爲之不厭，誨人不倦，則可謂云爾已矣。公西華曰，正唯弟子不能學也。
- ④『論語』衛靈公：子曰，君子謀道，不謀食，耕也，鋤在其中矣，學也，祿在其中矣，君子憂道，不憂貧。

- ⑤『論語』先進：……赤，爾何如。對曰，非曰能之，願學焉，宗廟之事，如會同，端章甫，願爲小相焉。……唯赤則非邦也與。宗廟會同，非諸侯而何，赤也爲之小，孰能爲之大。
- ⑥『孟子』萬章上：萬章曰，象日以殺舜爲事，立爲天子，則放之，何也。孟子曰，封之也，或曰，放焉。萬章曰，舜流共工于幽州，放驩兜于崇山，殺三苗于三危，殛鯀于羽山，四罪而天下咸服，誅不仁也，象至不仁，封之有庠，有庠之人奚罪焉，仁人固如是乎，在他人則誅之，在弟則封之。曰，仁人之於弟，不藏怒焉，不宿怨焉，親愛之而已矣，親之欲其貴也，愛之欲其富也，封之有庠，富貴之也，身爲天子，弟爲匹夫，可謂親愛之乎。敢問或曰放者，何謂也。曰，象不得有爲於其國，天子使吏治其國，而納其貢稅焉，故謂之放，豈得暴彼民哉，雖然，欲常常而見之，故源源而來，不及貢，以政接于有庠，此之謂也。
- ⑦『孟子』離婁下：孟子曰，人之所以異於禽獸幾希，庶民去之，君子存之，舜明於庶物，察於人倫，由仁義行，非行仁義也／孟子曰，禹惡旨酒而好善言，湯執中，立賢無方，文王視民如傷，望道而未之見，武王不泄邇，不忘遠，周公思兼三王，以施四事，其有不合者，抑而思之，夜以繼日，幸而得之，坐以待旦。

#### ④上文を領しない場合

截去された上文がある題目であっても，入題において領しない場合がある。路徳は次のように述べ，題目と上文とが関係していない場合には，截去された上文があっても，領しないとする。

問う，文に上文を領せざる者有るは何ぞや，と。曰く，上文と題と干する無き者は，領せざるも可なり。即ち與に緊相呼應（密接に互いにつながる）するも，亦た領する可からざる者有り。「有心哉，擊磬乎」（『論語』憲問）題①の如きは，斷じて「子擊磬於衛」を領す可からず。「割鷄焉用牛刀」（『論語』陽貨）題②は，斷じて「子之武城，聞弦歌之聲」を領す可からず。

第九箇の「他日」（『孟子』梁惠王下）題③は、必ず「魯平公將出」及び「嬖人」の二字を領す可からず。領する者は、必ず通品（学力を有する人）に非ず。餘は類推す可し、と（道光乙巳刊『時藝話』卷一・「退」條・二十九葉～三十葉）。

- ①『論語』憲問：子擊磬於衛。有荷蕢而過孔子之門，曰，有心哉，擊磬乎。既而曰，鄙哉，硜硜乎，莫己知也，斯己而已矣。深則厲，淺則揭。子曰，果哉。末之難矣。
- ②『論語』陽貨：子之武城，聞弦歌之聲。夫子莞爾而笑，曰，割雞焉用牛刀。子游對曰，昔者偃也聞諸夫子曰，君子學道則愛人，小人學道則易使也。子曰，二三子，偃之言是也，前言戲之耳。
- ③『孟子』梁惠王下：魯平公將出。嬖人臧倉者請曰，他日君出，則必命有司所之。今乘輿已駕矣，有司未知所之，敢請……。

## ⑤入題の長さ

入題は、長く書くのがよいのか短いのがよいのかということについては、路徳は次のように言い、やはり短ければよいとする。しかし、題目によっては、どうしても長くなってしまうものもあるという。しかし、上文を領したといっても、題目の流れに連ならないものは少しであってもいけないとするのである。

題目：他日

『孟子』滕文公上：墨者夷之，因徐辟而求見孟子。孟子曰，吾固願見，今吾尚病，病愈，我且往見，夷子不來。他日又求見孟子。孟子曰……（太字で示したところが題目である）。

入題：將俟孟子之往而往，果何日乎，使願非眞願，則雖有愈之日，終無往之日，又安得有見之日，積日而月，積月而歲，不已虛擲此日也哉  
 （將に孟子の往くを俟ちて往かんとす，果して何れの日なるや，願いをして眞の願いに非ざらしめば，則ち愈えるの日有り<sup>い</sup>と雖も，終に往く日無し，又た安くんぞ見<sup>あ</sup>うの日有ることを得ん，日を積みて月となり，月を積みて

歳となるも已まず、此の日を虚擲（虚しく捨て去る）するかな）

問う、領上（入題）の處 多きを貴ぶや、少なきを貴ぶや、と。曰く、愈々少なければ、愈々貴し。愈々多ければ、愈々劣れり。作者の工夫は但だ此の處の見る可きを觀る、と。問う、……此の文 却って上節を將って逐句（一句一句ごとに）ごとに之を領すること少なからず。多きや、と。曰く、上文は乃ち題の來脉なり。領處は乃ち文の入手なり。其の法 千變萬化し、一格に拘わらず。要するに皆な題の爲に設くるなり。並びに上文を默寫し、以て記功（記憶力）を示すに非ず。亦た上文を領して題の神理と相い貫注（貫通）せざる者は、一句と雖も已に其の多きを嫌う。其の貫注する者、多きこと數十字に至ると雖も、之を按ずるに確として是れ本題の文なれば、何ぞ多きを嫌わん。此の文の領上（入題）の處は即ち是れ醒題（題目をはつきりさせる）の處。逐層（段落ごとに）ごとに上を領し、逐層（段落ごとに）ごとに題を醒ます。多しと雖も亦た何ぞ傷まんや。之を總ずるに文に定法無く、惟だ是なる題を求む、是なる題なれば則ち其の多きを厭わず、是ならざる題なれば則ち惟だ其の多きを患う。諸卷 多く喜びて上文の一句を抄録し、足らざれば多きこと數句に至るは、又た誤りて村塾の陋習を以て奉じて定式と爲せばなり。毎に領上（入題）の處に于いて冠するに「如」字を以てし、復た「天（夫）」<sup>ママ</sup>字を以て語氣を隔斷す、[もしくは] 另に幾句の間話を説かずと云う。或いは更に已に抄するの上文を將って數句を敷衍し、然る後に本題に硬（むり）に落（落ちつけ）れば、一小段中の語氣 相い貫注せず。相い貫注せざれば、便ち是れ通ぜず。[起] 講 [の] 下（入題の箇所）は人の咽喉の如し、此の處 通ぜざれば、則ち周身（全体） 通ぜず。學ぶ者 求通に志す有れば、務めて須く此の處より參想すべし（道光乙巳刊『時藝話』卷一・「退」條・三十葉）。

## ⑥入題によくある欠点

路徳は、題目「此之謂大丈夫」（『孟子』滕文公下）の入題の箇所について、「今、諸卷の領上（入題）の處の法に合わざる者、什に其の九に居る。大約 數病より出でず」（道光乙巳刊『時藝話』卷二・「此之謂大丈夫」條・五十八葉）として、具体的に問題点を六つ挙げて次のように言う。

題目：此之謂大丈夫

『孟子』滕文公下：景春曰、公孫衍・張儀豈不誠大丈夫哉。一怒而諸侯懼、安居而天下熄。孟子曰、是焉得爲大丈夫乎、子未學禮乎、丈夫之冠也、父命之、女子之嫁也、母命之、往送之門、戒曰、『往之女家、必敬必戒、無違夫子』、以順爲正者、妾婦之道也。居天下之廣居、立天下之正位、行天下之大道、得志與民由之、不得志獨行其道、富貴不能淫、貧賤不能移、威武不能屈、**此之謂大丈夫**（太字で示したところが題目である）。

- ①逐層（段落ごとに）ごとに領出する者有り。纍纍（長々とした）たる數句にして、純（まったく）に是れ上文なれば、之を過多に失す。病の一なり。
- ②渾領法を用いる者有り。一句もて上の八句（居天下之廣居、立天下之正位、行天下之大道、得志與民由之、不得志獨行其道、富貴不能淫、貧賤不能移、威武不能屈）を括して、按去するも、却って括して不住（できない）、且つ上文の一字・本題（題目）の「此」の字を見ず、終に著落（落ちつかせる）する無し、是れ名無しの腫毒と謂う。病の二なり。
- ③「廣居」の三項（居天下之廣居、立天下之正位、行天下之大道得志）を領して、[そのすぐ] 下の五句（與民由之不得志、獨行其道、富貴不能淫、貧賤不能移、威武不能屈）を遺却する者有り。下の五句は本題に緊接す、乃ち題[目]の近き上文なり。近きを捨てて遠きを領すれば、惟れ[題目の]「此」字 全からず、並びに題氣をして眞ならざらしむ。病の三なり。

- ④専ら「不淫」の三項（富貴不能淫，貧賤不能移，威武不能屈）を領して，上の五句（居天下之廣居，立天下之正位，行天下之大道，得志與民由之，不得志獨行其道）を抛却する者有り。[そして] 自ら近き上文は最も要緊にして，領せざる可からず，遠き上文は，則ち領す可し，[もしくは] 領せざる可しと謂う。[しかしながら]「不淫」の三項の本領は，全く「居廣居」の五句に在るを知らず。若し領出せざれば，惟だ「此」字 全くならざるのみならず，直ちに是れ全題 根無し。病の四なり。
- ⑤又た「居廣居」より以て「威武不屈」に至るまでを云うに，自ずから兩頭（両方）を約舉（要約して取り上げる）し，一筆（一回）の總賬（総まとめ）を算じ得て，無葛萬藤（枝葉・無用なもの）を省却したりと謂う有り。此れ文法に非ず且つ文體を傷つけるを知らず。作文は算賬（勘定する）に非ざるなり，辨稿に非ざるなり，講書に非ざるなり。其の體裁 自ずから一定有り。安んぞ「知此云云」[のような常套句]を得んや。即ち成文中に間ま或いは之れ有り，乃ち其れ無聊（つまらない）の極まりなり。此の途に逃げ入り，[そして] 此の途 一たび開かれれば，上文の數十百句を論ずる無く，皆な此れを以て之を<sup>お</sup>了う可く，用心を勞せず（しなくてもよい）して人人可能なり。天下 安くんぞ人人可能にして，之を妙法と謂うもの有りや。病の五なり。
- ⑥又た明らかに此の題の領上（入題）の難きを知り，索性（思い切って）上の八句を將って之を置きて管せず，項下 直ちに「子 [公孫] 衍・[張] 儀を以て大丈夫と爲す」云々と云う有り。此の如く説き入れば，便 [利] は則ち便 [利] なり。却って本題の「此」字を思わず，究竟に如何に安放（安置）せん。且つ惟だ「此」字のみ法無く安放するのみならず，本題の六字（「此之謂大丈夫」）上の八句を緊承（しっかり承ける）し説き下るに，七八句無きが若きは，安くんぞ本題の六字を有るを得んや。今，近脈を舍却し，上の二節の遠脈を領するならば，試みに問う，孟子 此の六字を説く時，果たして本節の八句の下に在りしや，



抑そも上の二節の中間に在りしや、と。只だ文勢の便を圖りて、文法の安きを顧みず。直ちに是れ題氣を隔斷し、書理を割裂す。如何ぞ使得(できるのか)。前輩の文中 此等有りと雖も、須く此等の文を知るべし。是れ前輩の好き處にあらず。萬萬 訓を爲す可からず。學ぶ者此れを以て藉口(いいわけ)して、往往に咽因癢食(のどにつかえたのに懲りて食を断つように失敗を恐れて大事なことをやめてしまう)す。病の六なり(道光乙巳刊『時藝話』卷二・「此之謂大丈夫」條・五十八葉～六十葉)。

こうして、最後に、以上を総括して次のように述べる。

之を總ずるに作文する者は、徒に題理を詮するのみならず、須く題氣を審すべし。題氣を審するを要すれば、須く題脈を認めるべし。上文が乃ち題脈なり。凡そ語氣の一直に説き下る者は、題脈 近き上文に在り。便端(はしっこ)より説き起こす者は、題脈 遠き上文に在り。領法 千言萬化なれば、拘泥する可からず。作る者の心境の明暗・手法の巧拙は、但だ項下の數句の觀れば、即ち概見す可し。能文の士 毎に此の處に遇えば、一句も敢えて放鬆せず(緊張をゆるめない)、一字も敢えて輕下せず(忽せにしない)。誠に文の項下を以てすれば、即ち人の咽喉にして、飲食 此に由り、人の言語 此れより出づ、但だ宜しく通ずべし、利は最も隔塞を忌む。上文 當に領すべくして領せず、固より是れ隔なり。或いは舍却 當に之を上文に領すべきも、領するに必ずしも之を上文に領せざるは、亦た是れ隔なり。言上文を領し、曾て題を呼せず、却って是れ「夫」字・「今夫」・「且夫」字もて離開し、另に幾つかの句の間話するを説く、或いは格外に枝節を生出するは俱に是れ塞がる。人の咽喉 隔塞されれば、則ち五臟六腑 皆な隔塞さる。文の項下 隔塞されれば、則ち篇を通じて八股[の部分] 皆な隔塞さる。屢しば學を爲す者 諄切に之を言う。而るに解悟する者 仍お寥寥たるを覺ゆ。噫、此の訣 得ざれば、其の他の諸々の訣 安くんぞ得る可けんや(道光乙巳刊『時藝話』卷二・「此之謂大丈夫」條・五十八葉～六十葉)。

### ⑦題目に「此」字がある場合

また、⑥と同じ「此之謂大丈夫」の題目について、次のように解説して、題目に「此」字がある場合の解法について説明する。

題目：此之謂大丈夫

『孟子』滕文公下：景春曰、公孫衍・張儀豈不誠大丈夫哉。一怒而諸侯懼、安居而天下熄。孟子曰、是焉得爲大丈夫乎、子未學禮乎、丈夫之冠也、父命之、女子之嫁也、母命之、往送之門、戒曰、『往之女家、必敬必戒、無違夫子』、以順爲正者、妾婦之道也。居天下之廣居、立天下之正位、行天下之大道、得志與民由之、不得志獨行其道、富貴不能淫、貧賤不能移、威武不能屈、**此之謂大丈夫**（太字で示したところが題目である）。

入題：所居所立所行、合始終而一於此

（居る所・立つ所・行なう所、始終を合わせて此に一たり）

此の文の領上の處、僅かに十三字なるも、已に上文を將って領し盡くせり。並びに本題の「此」字を將って坐實（決定する）す。是れ専ら上文を領するのみならず、用法 最も便捷（便利で敏捷）なり。前の六字は、明らかに「居天下」の三句（居天下之廣居、立天下之正位、行天下之大道）を領し、後の七字は「得志」の五句（得志與民由之、不得志獨行其道、富貴不能淫、貧賤不能移、威武不能屈）を渾括す。此の十三字は須く合併して之を見るべし。前の六字の明領有り、故に後の七字は渾括するに妨げ無し。若し一味（ひたすら）に渾括し上文の一字も提出せざれば、則ち「此」字 仍お坐實し難し。凡そ題中に「此」字有る者は、其の實際 總べて上文に在り。務めて須く項下に於いて上を領し、後に「此」字を將って安放妥貼（ぴったりと置く）し、以て下 便ち「此」字を用いて題界を截清し、上文に糾纏（絡みつく）するを省得（しないように）すべし。此れ一定の法なり。若し此の處 出ださざれば、則ち後を以て出し難し。其の含糊なること到底（最後まで）なるを怪しむ無し（道光乙巳刊『時藝話』卷二・「此之謂大丈夫」）

夫」條・六十葉)。

### ⑧領上と叫題

截去された上文を領するとともに、題目も叫びだした入題については、次のように解説する。

題目「其舜也與」(『論語』衛靈公)

『論語』衛靈公：子曰、無爲而治者、**其舜也與**、夫何爲哉、恭己正南面而已矣(太字で示したところが題目である)。

入題：無爲而治者、何人哉

(無爲にして治まる者は、何人なりや)

五字もて領上とし、三字もて叫題とし、八字もて句を爲す。之を省くこと又た省けり。此の處 字を<sup>へだ</sup>聞て・句を<sup>へだ</sup>聞つを得ざらしむ。諸卷 毎に此の處に於いて、肯えて遽爾(輕率)に上を領せず、先ず幾句かの官面(意味のない)套話(常套句)を説き、然る後に「無爲而治」を説き到る。少なき者は數句、多き者は數行なり。此れ文法の謬なる者なり。領上は少なきを以て貴しと爲す。上文の太はだ多き者に遇えば、領せざれば得ず、[しかし]全く領するも得ず。此の處 須く手法を見るべし。總じて簡括を以て妙と爲す。安くんぞ上文を以て未だ足らずと爲し、更に上文の上に於いて<sup>べつ</sup>別に幾句かの上文を添える得んや。領するの後の叫題は、宜しく緊(しっかりとしめる)なるべし、宜しく醒(ゆるめる)なるべし、尤も宜しく含蓄あるべし。項下に<sup>よ</sup>縁れば、乃ち叫題の處は是れ出題の處にあらず。若し含蓄あらざれば、看去(みたところ)直ちに是れ出題なり、是れ叫題ならず。諸卷

領上の後に於いて毎に「吾不禁穆然於舜矣(吾 舜に穆然たるを禁ぜず)」と云う、或いは「吾嘗上下千古、而稽古帝舜(吾 嘗て上下千古にして、而して古の帝舜に稽う)」と云う。題の一口を將って説き完う。惟だ下を以て再び説く可きこと無きのみならず、且つ「其」「也」「與」の三字を將って

一筆に抹煞（抹殺）す。文法 安くに在りや。或いは「舜」字を出す後に於いて、又た一句を贅して「夫舜固無爲而治者也（夫れ舜は固より無爲にして治まる者なり）」と云う。或いは又た「夫舜何以無爲而治哉（夫れ舜は何を以て無爲にして治まるや）」と云う。惟だ題を將って説き完るのみならず、並且（さらに）題の外に溢れ向かう。惟だ下文を侵占するのみならず、並且（さらに）下文を抹煞す。此れ無法の極なる者なり。作文するに須く先ず步驟（手順）を講ずべし。童子 初めて開筆の時、即ち須く之を知るべし。況や成人をや。此の處 一たび錯えば以下更に是なる處無し。項下の數句 最も緊要に關す……（道光丁未刊『時藝階』卷三・「其舜也與」條・三十一葉～三十二葉）。

では、続いて『初學啓悟集』に収められた入題について検討を行ないたい。

### (3) 具体例

『初學啓悟集』では、上截題・下截題・上截下截題について初学者むけの入題が収められ、コメントも付されている。そこから入題はどのようなところに注意して作成されたのかを見てみよう。

#### ①上截題（領上と叫題と）

題目「不亦君子乎」（『論語』學而）九葉

『論語』學而：子曰、學而時習之、不亦說乎、有朋自遠方來、不亦樂乎、人不知而不愠、**不亦君子乎**（太字で示したところが題目である）。

入題：如學至人不知而不愠、若而人者其自命居何等乎

（至人の知らずして愠らずを學ぶが如し、若而人① 其れ自ら命じて何等に居らんや）

①此の如きの人・『春秋左氏傳』襄公十二年。

入題 上文を領して後、若し即ち「君子」を説けば、未だ太はだ急なるを免

れず。若し「君子」を呼ばざれば、未だ太はだ寛（ゆっくり）なるを免れず。須く「君子」は人品に屬して説くを知るべし。其の「若〔而〕人〔者其自命〕居何等〔乎〕」を以て呼を作るを見るに、虚實 宜しきに合す①と謂う可し……（光緒戊子刊『増註 初學啓悟集』巻一・十葉）。

①唐彪は「文章 實に非ざれば以て義理を闡發するに足らず、虚に非ざれば以て神情を揺曳（うごかす）するに足らず。故に虚實 常に宜しく相<sup>たす</sup>い濟くべきなり」（康熙四十七年刊『讀書作文譜』巻之七・一葉）という。

## ②上截題（領上）

題目「曾是以爲孝乎」

『論語』爲政：子夏問孝。子曰、色難、有事弟子服其勞、有酒食先生饌、**曾是以爲孝乎**（太字で示したところが題目である）。

入題：色之外既服勞、奉養如是矣

領脈（色の外 即點「是」字 既に勞に服す、奉養 是の如きか）

領處に至るに「色」を脱する可からず。又た上の二句を領すれば、未だ累墮（余計なもの）なるを免れず。其の領法を見るに何等ぞ簡捷緊醒ならん。學ぶ者 文を讀めば毎に其の易きを忽せにし、文を作るに輒ち其の難きを覺る、須く平日 身を處地に設け（他人の身になって考える）、細かに其の用心・用筆の佳きを察すべきなり（光緒戊子刊『増註 初學啓悟集』巻一・十一葉）。

## ③上截下截題

題目「言寡尤、行寡悔」三葉

『論語』爲政：子張學干祿。子曰、多聞闕疑、慎言其餘、則寡尤、多見闕殆、慎行其餘、則寡悔、**言寡尤、行寡悔**、祿在其中矣（太字で示したところが題目である）。

入題：如言行交愼而有以寡尤寡悔固已

（言行 交ごも愼しみて、寡尤・寡悔を以て固くする有るが如し）

入題は「愼」字を領す。總じて上の「寡尤」・「寡悔」を點づ（提起する）。  
本題を呼ばざる者は、[入題の次の] 提比を留めて勢いを開くを作ればなり  
（光緒戊子刊『増註 初學啓悟集』卷一・十一葉）。

#### ④下截題

題目「默而識之」

『論語』述而：子曰、默而識之、學而不厭、誨人不倦、何有於吾哉（太字で示したところが題目である）。

入題：今夫人于前言往行、孰不以多識爲期哉

（今、夫れ人 「前言往行」①に于いて、孰が<sup>たれ</sup>多く識るを以て期と爲さざらんや）

①『易』大畜に「君子は以て多く前言往行を識りて、以て其の徳を畜う」。

入手は、先ず「識」字を提す。下は、「識」より轉じて「默」に到る。此れ輕きより重きに入るの法なり（光緒戊子刊『増註 初學啓悟集』卷一・十七葉）。

続けて補足的なことになるが、八股文には、入題を用いない形式のものもある。そこで、そのことを検討してみたい。

#### （4）入題を用いない形式

唐彪は、『讀書作文譜』で入題について次のように述べる。

〔入題〕唐彪 曰く、凡そ書に宜しく上文を領すべき者有り、必ず宜しく上

文を領すべからざる者有り。「不亦説乎」（『論語』學而）①・「本立而道生」（『論語』學而）②・「則以學文」（『論語』學而）③が如き此等の題は、題理  
 上文より出づれば、自ら應に來脉を承領すべし。夫の「恭近於禮」（『論語』學而）④・「主忠信」（『論語』學而）⑤・「富而無驕」（『論語』憲問）⑥等の題の若きは、題理 上文より出でず、何ぞ必ず強いて聯絡を爲さん。前輩 此等の題に於いて、俱に上文を領せず、而るに今人 必ず之を領するは、寔に理に非ずと爲す（康熙四十七年刊『讀書作文譜』卷之九・七葉）。

- ①『論語』學而：子曰，學而時習之，不亦説乎……。
- ②『論語』學而：有子曰，其爲人也孝弟，而好犯上者，鮮矣，不好犯上，而好作亂者，未之有也，君子務本，本立而道生，孝弟也者，其爲仁之本與。
- ③『論語』學而：子曰，弟子入則孝，出則弟，謹而信，汎愛衆，而親仁，行有餘力，則以學文。
- ④『論語』學而：有子曰，信近於義，言可復也，恭近於禮，遠恥辱也，因不失其親，亦可宗也。
- ⑤『論語』學而：子曰，君子不重則不威，學則不固，主忠信，無友不如己者，過則勿憚改。（唐彪は、子罕篇で「子曰，主忠信，無友不如己者，過則勿憚改」となっており，「君子不重則不威，學則不固」の箇所がないため，題理が上文から出ていないとするのであろう）
- ⑥『論語』憲問：子曰，貧而無怨難，富而無驕易。

入題では、題理によって截去された上文を領したり、しなかったりするという。

そして、以前は上文を領するのにきっちりとした法則があったが、それが無くなったという。そもそも、その法則とは、承題の終わりの部分で領したり、起講の前の部分で領したり、起講の頭の部分に入れたり、起講全体で領したり、題目だけで入題を作ってから上文を領する形を取るようなものであった。ただし、今の起講の後に置かれる入題は、こうした法則に則っていないが、認めてもよいとする。

ところが、起講ですべてが完備しているのに、起講の後に入題を置くという形式にとらわれて、無理やり入題を作ることがあり、かえって形式から逸脱することがある、と指摘する。つまり、唐彪によると、入題は、必ず作成しなければいけないものではなかったというのである。

且<sup>そも</sup>も先輩の當に上を承くべき者に於けるや、其の上を領するは亦た甚だ法有り、而るに今人 又た全く其の法を失う。嘗て現<sup>いま</sup> 在るの文を取りて之を觀るに、承題の末に領する者有り、開講（起講）の首に領する者有り、襯（下に敷く）るに詞華（きれいな文章）を以て講（起講）の上截に鎔化（溶け込ます）する者有り、全講（起講の中で）上文の意を將って説き到底（つくす）者有り、先ず本題を做し勢いに隨いて上文を將って状〔かたち〕を作る者有り。此れ皆な先輩の妙法なり。今人 多く提股の中に聯絡し、已に先輩の法を遺失す。然れども猶お可なるがごときなり。起講 已に完<sup>まった</sup>きに至りて毫も襯貼する無きも、上文の一二句を硬に嵌める者あり。書の義を以て之を言え、是れ先ず本題有りて而して後に上句有るなり。文の體を以て之を言え、儼として一贅瘤の如きなり。是れ體なるや、吾 何ぞ以て羣奉して金科玉律と爲すかを知らざるなり……、と（康熙四十七年刊『讀書作文譜』卷之九・七葉～八葉）。

唐彪がこのような述べるのは、すでに、拙稿「清代八股文における破題・承題について」（『経済理論』第312号・78頁）で触れたことであるが、明の初期・中期の八股文の承題の末尾によく付け加えられた「原題」と呼ばれる部分があったことによるのであろう。「原題」は、題目の截去された上文を領する箇所であった。そして、唐彪は、八股文の体裁の上からすると、こちらのほうが見映えがよいとする。

唐彪 曰く、……〔「原題」というものは〕明初・中葉の文 多く承題の末に於いて上文を承領（応じる）す。此の體 最も美善と爲す。何ぞや。未だ口氣に順わざる〔起講の〕前、上文を承領すれば、則ち上文は上に在りて、本題（題目）は下に在り。體裁 順なり。〔起講で〕既に口氣に順い、〔入



題で] 始めて上文を領すれば、則ち本題（題目）は上に在り、上文は下に在り、義理 顛倒す。苟し布置 宜しきを得れば、猶お或いは義に背かず。布置 一たび其の宜しきを失えば、則ち體裁 乖舛すること甚だし。故に成（成化年間〔一四六五年～一四八七年〕）・弘（弘治年間〔一四八八年～一五〇五年〕）以前の文 多く承 [題] 末の「原題」なる者に于いて此を爲すの故なり……、と（康熙四十七年刊『讀書作文譜』卷之九・五葉～六葉）。唐彪によると、明の初期・中期の八股文でよく行なわれた、破題・承題・原題・起講の形式は、題目の意味を破き（破題）、それをさらに解説し（承題）、題目の截去された上文を簡単に述べ（原題）、本論の要点を簡潔に述べる（起講）ようになるという。ところが、清代になって行なわれるようになる破題・承題・起講・入題という順序では、入題の後ろの八股によって表現される本論の導入部になることはなるものの、起講で本論の要点を述べた後に、また本論の導入部が来ることになるので、体裁上よくないのではないかとするのである。

清代では、破題・承題・起講・入題という順序で作られることが多かった。ただ、唐彪の言うように入題のない八股文も多く存在した。

## おわりに

『増訂匯學讀本』では、これまでの入題についての解説をまとめて次のように言う。

起講の後、[題目の] 上文の三兩句を領して提股に接入する、之を入題と謂う、亦た領脉と曰う。其の上文無き者、或いは虚喝（はったりをきかす）を用いる、或いは本題に就きて提挈（要領を得る）するあり。要するに上文の勢いを視て之を爲す、止だ簡捷（簡単直截）を以て妙と爲す○起講の文の住（とど）む可からずして、即ち勢いに借りて落下し、起講の尾を以て入題と爲す者有り。另に記事題の講末に全題を盤出し、必ずしも領脉を作らざる可き者有り。入題の特に主意を出だして一篇の柱とし、後文の分股と前作と應ずる者有り。此れ又た題に随いて布局するの法なり○又た兩句

須く下句を關到（照らして）し，然る後に上句に倒入し出題を作るべし○  
凡そ領脉，或いは題の一二字を點づ，或いは虚喝あり，或いは顛倒雜出（形  
式をくずす）す，總じて須く虚歩を占め後歩を留めるべし（光緒十四年刊  
『增訂匯學讀本』四十一葉）。

このように，入題とは，八股で表現される八股文の本論の部分の直前に置かれ，  
その導入部となる箇所であったのである。